

1. 放課後の獄寺単人

いいんですよ、謝ることないじゃないですかと獄寺としてはその度に思うのだが沢田綱吉と十代目は「すいませんでした！」と、まず風紀委員長に謝る。悪いのは彼であるはずもないのだが、どうしたって迷惑な野郎の代わりについてこの男に向かって詫言っている。

「もう泣くなつて」自分のせいだろう。

呼んでもいないのに学校に乗り込んできたアホ牛が鼻血を噴くやら泣きわめくやらで獄寺単人の大事な十代目は、あたふたと自分たちを置いて保健室に行ってしまった。ぐずったままのアホ牛を横抱えにこけつまるもせず。

「あ、あ！ 獄寺君、山本！」

階段でくると振り向いてごめん、先帰つてて、と言いつつも残すのも忘れない。ごく当たり前のように気遣いが出来るツナが獄寺にはうれしい、もつとも彼が何を言おうがしょうが自分がそばでそれを見、実感しているのならなんだつてうれしいことにはかわりがないのだが。

「……」

雲雀と山本はそれを黙って見送り、獄寺単人は保健室に届けようといそいそと教室に向かって歩き出した。先に帰るなんてそんな。

そのときだった。あいつさー、と背後の山本は誰にともなく言った。

「あいつさー、お前のこと好きみたいだ」

——オレか？

ばつと振り向く。当たり前だ！ 右腕なんだからな！ そんな溢れそうになる気持ちを思わず口から漏らそうとして、どこか違うような雰囲気気付く。

見慣れた風景はかちんと凝り固まったようで、わずかだが緊張感さえある。だが視線はこちらにはない。山本は獄寺ではなく、雲雀に言ったのだ。雲雀は武器を持ったまま無表情に山本を見返している。引き結ばれた唇はどこか不意そう、瞬き一つでもしたらそれがぶんと飛んできそうなのがした。

「ツナに優しくしてくれなんて言わねーけど、オレ、あいつ大事だからよー」そういうところは獄寺と同じだ。

と山本は笑う。濁りのない、からりとした明るい顔で。獄寺は眉根を寄せてそれを耳にしながら「テメーと一緒にすんな、と考えていた。」

「ほんっとーに大事だから、いじめないでやってくんねーかな」

——は？

首を傾げてしまふ、この男は一体何を言っている？

「な！」ヒバリ。

雲雀は聞いているのかさうでないのか、無言でドンフアーをしまふと（いつもどこに隠し持っているんだかわからない）背を向けてすたすたと行ってしまう。暴走というよりも独走するこの戦闘好きな風紀委員長を山本はどこかまく扱っていた。それは敢えて漂う空気を無視する山本のこだわらない性格のせいかと思っていたが、どうもそうではないらしいと最近思うようになっていたところだった。

「——」

どこか釈然としない不快さが残る。獄寺は雲雀を見送って、山本を見る。山本は普通にいつも通りのゆるんだ顔をしていた。

この男はたしかにツナをよく見ている、しなくてもいいものを彼の顔色一つで獄寺が気にすれば同じように心配し、いなくてもいいのに、話しているとひよいと顔を出したりする。邪魔をしているのかといつもイライラするが引くときはいいのかと思うほどあっさり引くし、何しろ獄寺よりも関わり合った期間は長い。自分が尊敬し、慕うボンゴレ十代目に『友人』という存在はあるだけでも邪魔だが、いないよりいた方がいいような気もするし、右腕という信頼による絆に時間など関係ないと思いつつ、やつぱりそういつた小さな引目が重なってあるものだから獄寺もたまに一步退がったところから窺ったりなどしてしまうのだ。我ながら忌々しい。

「：何言つてんだ？ 野球バカ」

山本は考えるようにうーんと頭を掻いてからぼそりと続ける。

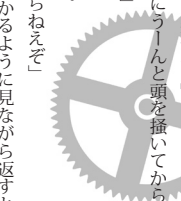
「宣戦布告：かな？」


「はア？」

聞き捨てならない。

「十代目の右腕は譲らねえぞ」

ゆつくりと挑みかかるように見ながら返すと、その視線を受けて相手は分かっている





るという風に肩を疎めてみせた、こういう意外なところがたまに計りがたい。

長い影がさつと獄寺の横を過ぎてゆく。

「ヒバリは動物並みにほんと耳とかいいんだ」

「……」

足を前に出した。迫っような形になって腹立たしいが、山本に体格では負ける、だが他では負けない。身長だつていずれ追いつく、十年、二十年後もツナの横に居られるように、誰もが右腕だと認める人間になるようにどんな努力だつてする。獄寺にどうして山本はもちろん、笹川だつてほとんど敵みない存在だ。特に雲雀や六道骸はずべてにおいて許していない。ほんとうに守護者だの関わりがなければ雲雀恭弥が動物並みの聴覚から嗅覚まで持っていたとして、それは獄寺の興味の中に掠りもしないというのに。……、奴つて、何者？

「あいつ、ツナの声によく反応する」

「んだと？」

だからな、と山本は困つたように笑つた。でも全然笑えてない、目がマジモードだ。

「そういうの、マズいだろ？」

「当たり前だ！」

それは雲雀の探知システムにツナは常にマークされているということで、厄介なことこの上もない。ランボや子ども達以上の面倒さである。

「……いくら十代目だからといってもあんな危険人物、何しでかすかわからねえ。十代目をお守りするため、オレがもつとしっかりしなけりゃ……」

「でもよー、ツナも強くなつてっから」

「そういう問題じゃねえ、一緒にすんな」スタンスだつて違う。

彼の強さは背負うものによる。趣味のように戦う雲雀とは星と石くらいに違う、と吐き捨てるように言うのと横で山本がわかねえと笑つた。

「なに笑つてやがんだ、真面目に考えろ。だいいちお前、ヒバリに変なこ言いやがつて。誤解されるような言い方すんな、十代目をお慕いする気持ちはオレのが絶対的に強い」

と、歩調を緩めて雲雀の去つた方向を見遣る。ツナ達がよく通る教室近くの廊下や階段、しょつちゅう行く屋上やらに雲雀は必ず居て、嫌なら時間をずらしたりすれば

いいものを、宝くじもかくやと思えるくらいに遭遇率は高い。ツナが大抵あつと声を出すことで連の悪いほどの鉢会いぶりが分かる。

「ヒバリもあんのヤロー、一人がいいならこんな場所彷徨くことねえじゃねえか」

今日も何故かアホ牛が校内に入り込んで放課後の廊下で大騒ぎしたがためにこですと言わんばかりになつたが、授業は終わったのだから応接室にこもるなり、校外活動をしていったつて良い。いや寧ろ外の群れを狩りに行つてろ、ここから果てなく遠くへ。

「学校好きだからなー」

「軽く片付けんな、つたく……」

開いた窓からか風が吹き込んできた。伸びた前髪を揺らす、獄寺は払うように首を振つてから山本を見た。

「大事だから重くないように言つただけどなー」

「あ？」

「ツナ、大事だろ？」

「当たり前だ！」

だよな、と頷き、掬い取るべきようなことはできるだけ軽めに口に乗せるのだと、その方が聡い人間はもちろんそうでない人間にもきつと通ると思つ、と確信めいた口調で言う。山本のアホなのに、そういう脊髄反射的に鋭いところが苦手で、嫌いなのだ。

「獄寺がオレの代わりにそういうの怒つたりすつからなー」

彼はなんてことない顔で風に吹かれていた。山本は短いので髪が視界を邪魔することはない。そう、いつでもクリアだ。

「？ 何言つてんだ？」

「そーだから、オレ、スキにいられんだな」

獄寺のように手でよけたり、掻き上げたりする必要はない、目的に対してクリアすぎる。だから見えないのだ、うざつたくもちらつくものが。

見ようともしないから、山本は。

「は？」

「な！」

にしし、と山本は歯を見せて笑う。得したようなその笑顔はわけのわからない獄寺

としては引く。理解しようとも思わないが、ときおりそんなのがイラつきときて無性に蹴りたくはなる。

2. 山本武は部活中

自分の目はいつも親友を追っている訳ではない。

「……」

並盛中には陸上部もサッカー部もあるからグラウンドもいつも野球部が使えるわけでもない。山本武が所属している野球部の今日の練習メニューは走り込みと、素振りだけだった。校舎に近い場所ではチャッチボールは禁止されているのでピッチャーだけがキャッチャーと移動して体育館の横でピッチングの練習をしている。

走り終わったらストレッチをする、ついでに筋トレなんかもくつついているが力比べのお遊び程度のものだ。テニス部も同じように走っていたから構内のそこかしこに部で散って練習することになる、あちらはウォームアップを終えたらコートだ。野球部は校舎に囲まれた中庭のところにでんでん場に場所を取っては組になつて身体を伸ばしていた。

「今日、音楽の再試験だつてよ」

びろびろ聞こえるだろ、と組んでいるセンターで打順は一番のチームメイトが髑を伸ばしながら言う。花壇の横は技術工作室で音楽室はその真上だ、いつもは吹奏楽部のマウスピースのピーピー音や木琴やらが聞こえる場所からは確かにリコーダーの音が聞こえていた。

「ソラシってやつ、あれ、吹かなきゃだろ」

あー、と山本は声を上げた。

「そうだったなー」

口では言ったが、今日ツナが朝から運指の練習をしていたから知っている。曲名も忘れてしまったがミラレラファが上手く吹けないんだよと譜面を手に弱り切った顔の獄寺と顔を見合わせていた。手先の器用な獄寺はゆっくりでもいいんですよ、と言ったが彼自身がこなせてしまうのでうまく出来ないということを根本的に分かっ

そうにも見えた。

「……」

音楽室を見上げる、さつきから曲らしい旋律は聞こえてこない。山本自身もあまり頭で考えずに動いてしまうところがあるのでこのリコーダーの課題もなんとなくで済ませてしまったのだが。

吹けなきゃ一緒にいられたんだけどなあ。

頭上に降る音が気になつて仕方がない。

頼りなさげに、一部分に変な音が混じりそうになる曲があればそれと分かるのだが、待つても届きそうになく、ギリギリまで練習してからと言つてたから教室にでもいるのかとも思つてしまう。どうもこの頃雲雀恭弥の機嫌が悪いような気がしてならない、彼に鉢会わねばいいのだが、あれ、会つても良いのか。でもなあ。

「中学にもなつてリコーダーで居残りは恥ずかしいよなあ」

チームメイトは山本の様子に気付くそぶりもなく腕を頭の後ろに組み、ストレッチを続けながら嫌そうに眉を顰める。

「そうか？」

「休んだりしてんらしよーがねーけどよー」

声といい、明らかに音楽教諭に対する批難が見えている。そういえばツナも恥ずかしいと頂垂れていた、だけど山本あまりそうとは思わなかつたので同じことを考えるんだなあどどこか感心してしまふ。

「勉強するよりマシだけだな」

「え、オレ実技の方がヤダ」

これもまた親友と同じだ。

たとえば体育とか、美術とか、なんだかヌメヌメを痛烈に実感するから実技はイヤだ、英単語の意味が分からない方がまだ救いがあるよと溜息混じりにぼやく声が蘇る。獄寺はよく分かりますと頷いていたが、その違いがイマイチ山本には分からないでいる。

「パットどこ？」

「あつち」

「素振り終わつたらミーティングやるからな」サボンなよ。

ひよっこりと顧問が窓から顔を出して言う。

